

7月予報（全15枚）

病防第51号  
平成21年6月30日

関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）  
平成21年度発生予報第4号を下記のとおり発表したので送付します。

平成21年度病虫害発生予察予報第4号（7月予報）

平成21年6月30日  
熊 本 県

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成21年6月26日福岡管区気象台発表（単位：％）

要 素	予 報 対 象 地 域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気 温	九州北部全域（含、山口県）	20	50	30
降 水 量	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30

2 発生予報 概要

作 物		病虫害名	発 生 量		作 物		病虫害名	発 生 量	
			平年比	前年比				平年比	前年比
水   稲	早期	穂いもち	やや少	並	水   稲	早植・普通期	ツマゲ・ロコハ・イ	並	並
	早植	葉いもち	やや少	並			ヒメトビ・ウカ	やや多	やや多
	普通期	葉いもち	やや少	並			セジ・ロウカ	やや少	並
	早期・早植	紋枯病	並	並			トビ・ロウカ	並	並
	早期	かみじ類	多	多			コブ・ノメイガ	並	並

作物	病害虫名	発生量		作物	病害虫名	発生量	
		平年	前年比			平年比	前年比
茶	炭疽病	ㇿ少	並	カンキツ	かいよう病	ㇿ少	ㇿ少
	もち病	ㇿ少	並		黒点病	ㇿ少	並
	ㇿノコㇿモハキ	ㇿ少	並		ミカンハダニ	ㇿ多	ㇿ多
	チャハマキ	ㇿ少	並		ㇿノキㇿアミマ	ㇿ多	ㇿ多
	チャノホソガ	ㇿ少	並	ナ シ	黒星病	ㇿ少	ㇿ少
	ㇿノキㇿアミマ	並	並	カ キ	炭疽病	ㇿ少	並
	ㇿノミト ㇿメコハ イ	並	並	ブドウ	べと病	ㇿ少	ㇿ少
	ㇿザ ㇿハダニ	ㇿ多	ㇿ多	果樹全般	果樹ㇿムシ類	並	並

作物	病害虫名	発 生 量		作物	病害虫名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
夏秋トマト (高冷地)	葉かび病	ㇿ少	ㇿ少	夏秋 果菜類	コナジラミ類	並	ㇿ少
	すすかび病	並	並		アザミウマ類	ㇿ多	ㇿ多
	灰色かび病	並	並				
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	ㇿ少	並	イチゴ (育苗床)	ハダニ類	ㇿ多	並
夏秋ㇿウリ (高冷地)	べと病	ㇿ少	ㇿ少	ㇿハツ (高冷地)	コナガ	並	並
イチゴ (育苗床)	炭疽病	並	並	野菜全般	ハスモンヨトウ	並	並
	うどんこ病	並	並		オオタバコガ	並	並
ㇿハツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病等)	並	並				

### 3 予報概要、根拠、対策等

#### 水稻

#### 1) 穂いもち(早期)

(1) 発生量: やや少

(2) 根拠 ア 6月の早期水稻の巡回調査では、穂いもちの発病株率は1.5%と(平年10.0%)と平年より少ない発生であった。

イ 気象予報によると、7月は気温、降水量ともに平年並の予想である。

(3) 対策 ア ほ場を見回り発生状況に注意するとともに、穂いもちの発生が多いほ場では穂ばらみ後期に防除する。

#### 2) 葉いもち(早植)

(1) 発生量: やや少

(2) 根拠 ア 6月の早植水稻の巡回調査では、葉いもちの発生は認められなかった(平年1.2%)。

イ BLASTAMの判定結果では、6月の好適条件出現日数は0~2日(前年0~3日)と前年より少なかった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並~少であった。

エ 気象予報によると、7月は気温、降水量ともに平年並の予想である。

(3) 対策 ア いもち菌は25 前後で湿度が高いときに増殖しやすい。気象条件に注意し、病勢進展が予想される場合は発生初期に薬剤を散布する。

#### 3) 葉いもち(普通期)

(1) 発生量: やや少

(2) 根拠 ア 6月の普通期水稻の巡回調査では、葉いもちの発生は認められなかった(平年1.3%)。

イ 病害虫防除員からの報告では、葉いもちの発生は平年並~少であった。

ウ 気象予報によると、7月は気温、降水量ともに平年並の予想である。

(3) 対策 ア いもち病に効果のある育苗箱施用剤を使用していないほ場では、気象条件に注意し、病勢進展が予想される場合は発生初期に薬剤を散布する。

#### 4) 紋枯病(早期・早植)

(1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めていない(平年の発病株率0.0%)。

イ 気象予報によると、7月は気温、降水量ともに平年並の予想である。

(3) 対策 ア 穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤散布を行う(要防除水準: 穂ばらみ期の発病株率20%)。

#### 5) カメムシ類(早期)

(1) 発生量: 多

(2) 根拠 ア 上天草市松島町におけるイタリアンライグラス及びイネ科雑草でのすくい取り調査では、最重要種であるクモヘリカメムシの捕獲数が平年(過去5カ年)の約3倍と多かった。ホソハリカメムシ、アカスジカスミカメ、シラホシカメムシ及びミナミアオカメムシの捕獲数は平年並であった。

イ 気象予報によると、7月は気温、降水量ともに平年並の予想である。

(3) 対策 ア 防除適期は、穂揃い期とその7~10日後(乳熟期)である。2回の防除で生存虫や新たな侵入が認められる場合は、穂揃い期の14~20日後(糊熟期)に追加防除を行う。

イ クモヘリカメムシの防除には、合成ピレスロイド系、有機リン系薬剤の効果が高い。

ウ カメムシの種類によって薬剤の効果異なるため、発生している種類を調べて、効果の高い薬剤を選定する。

エ 水稻出穂後に周辺雑草を除草すると、本田への飛来を助長するので行わない。

オ 平成21年6月24日付け注意報第1号（斑点米カメムシ類）を参照

6) ツマグロヨコバイ（早植・普通期）

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり0.7頭(平成0.2頭)と平成並の発生であった。

イ 生産環境研究所（合志市）における予察灯による捕獲数は、5月1半旬～6月4半旬までは平成並であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成比やや多～少と地域によって差が見られ、平坦地域で多い傾向にあった。

エ 気象予報によると、7月は気温、降水量ともに平成並の予想である。

7) ヒメトビウンカ（早植・普通期）

（1）発生量：やや多

（2）根拠 ア 6月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり1.3頭(平成0.5頭)と平成並の発生であった。

イ 生産環境研究所（合志市）における5月1半旬～6月4半旬の予察灯およびネットトラップによる捕獲数は、予察灯では平成並であったが、ネットトラップでは平成よりやや多かった。

ウ 病害虫防除員の報告では、6月の発生は平成並～やや少であった。

エ 気象予報によると、7月は気温、降水量ともに平成並の予想である。

オ 最新の飛来情報は、病害虫防除所のホームページを参照。

（3）対策 ア ヒメトビウンカはイネ縞葉枯病を発生させるので、本田初～中期のヒメトビウンカの発生に注意し、発生量が多い場合は本田防除を行う。

イ カーバメート系剤およびIGR系剤で感受性の低下が確認されているので、薬剤の選定には注意する。

8) セジロウンカ（早植・普通期）

（1）発生量：やや少

（2）根拠 ア 6月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり0.04頭(平成1.3頭)と平成より少ない発生であった。

イ 生産環境研究所（合志市）および天草農業研究所（天草市）における予察灯並びにネットトラップによる捕獲数は、5月1半旬～6月4半旬まで平成より少なかった。

ウ 気象予報によると、7月は気温、降水量ともに平成並の予想である。

（3）対策 ア 育苗箱施薬剤を使用していないほ場や本田での密度が高いほ場では、本田散布を行う（要防除水準：水稻移植後10日までは2～5頭/株、11日以降は6～10頭/株）。

イ プリンス剤に対して感受性の低い個体群が確認されている。薬剤の残効が短い場合があるので、育苗箱施薬剤を使用したほ場においても本田での発生に注意する。

ウ 最新の飛来情報は、病害虫防除所のホームページを参照。

9) トビイロウンカ（早植・普通期）

（1）発生量：並

- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年0.0頭)。  
 イ 生産環境研究所(合志市)の予察灯及びネットトラップでは、6月24日に初飛来(2頭)を確認した(過去10年平均の初飛来日6月11日)。  
 ウ 気象予報によると、7月は気温、降水量ともに平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 今後の飛来情報および本田での発生状況に注意し、防除が必要となる密度を超えた場合はただちに防除する(要防除水準:7月下旬~8月上旬において20頭以上/100株)。  
 イ アドマイヤー剤に対して感受性の低い個体群が確認されている。薬剤の残効が短い場合があるので、育苗箱施薬剤を使用したほ場においても本田での発生に注意する。  
 ウ 育苗箱施薬剤と本田期の防除薬剤には同一系統を使わない。  
 エ 最新の飛来情報は、病虫害防除所のホームページを参照。
- 9) コブノメイガ(早植・普通期)
- (1) 発生量: 並
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の巻葉数0.0枚/株)。  
 イ 天草農業研究所(天草市)における予察灯では、6月4半旬まで捕獲されていない。  
 ウ 気象予報によると、7月は気温、降水量ともに平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 飛来情報に注意するとともに、コブノメイガに効果のある育苗箱施薬剤を使用していないほ場や本田での発生が多い場合は、第2世代幼虫期(飛来世代 第1世代幼虫~成虫 第2世代幼虫)に防除を行う(要防除水準: 第1世代の被害株率が20%以上)。  
 イ 本田防除剤の散布適期は、粒剤が発蛾最盛期、粉剤は若齢幼虫期(発蛾最盛期1週間後)である。  
 ウ 最新の飛来および発蛾最盛期の情報は、病虫害防除所のホームページを参照。

## 茶

- 1) 炭疽病
- (1) 発生量: やや少
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉は0.1葉/m<sup>2</sup>(平年1.3葉/m<sup>2</sup>)と平年比やや少の発生であった。  
 イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。  
 ウ 気象予報によると、7月の気温、降水量とも平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 今後、曇りや雨の日が続く、感染に好適な条件になることも予想されるため、常発地では、摘採残葉の発病状況等に注意し、三番茶萌芽期~1葉期に防除を行う。
- 2) もち病
- (1) 発生量: やや少
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉を認めなかった(平年0.3葉/m<sup>2</sup>)。  
 イ 気象予報によると、7月の気温、降水量とも平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 二番茶に多発した茶園では、二番茶摘採後に整せん枝を行い、病葉を摘採面から除去する。
- 3) チャノコカクモンハマキ
- (1) 発生量: やや少

- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉を認めなかった( 平成0.6枚 / m<sup>2</sup> )。  
 イ 生産環境研究所( 合志市 ) のフェロモントラップでは、発蛾最盛期は平年より1半旬早い6月第3半旬で、ピーク時の誘殺数は平年より少なかった。  
 ウ 茶業研究所( 御船町 ) の調査では、発蛾最盛期は平年より1半旬遅い6月4半旬で、発生量は平年比多であった。  
 エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。  
 オ 気象予報によると、7月の気温、降水量とも平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 次世代の発蛾最盛期は平年並( 7月5半旬～6半旬 ) となることが予想されるので、ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期を対象に防除を行う。通常、各茶期の摘採直後が防除適期になる。  
 イ 中刈り等の更新は、産卵及び生息場所を失うため密度低下に効果がある。

#### 4) チャハマキ

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉を認めなかった( 平成0.1葉 / m<sup>2</sup> )。  
 イ 生産環境研究所( 合志市 ) のフェロモントラップでは、平年比少の発生であった。  
 ウ 茶業研究所( 御船町 ) の調査では、発蛾最盛期は平年より1半旬遅い6月2半旬で、平年比多の発生であった。  
 エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。  
 オ 気象予報によると、7月の気温、降水量とも平年並の予想である。
- (3) 対策 ア ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期を対象に防除を行う。通常、各茶期の摘採直後が防除適期になる。  
 イ 中刈り等の更新は、産卵及び生息場所を失うため密度低下に効果がある。

#### 5) チャノホソガ

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉数は2.2葉 / m<sup>2</sup> ( 平成6.6葉 / m<sup>2</sup> ) と平年比やや少ない発生であった。  
 イ 生産環境研究所( 合志市 ) のフェロモントラップでは、平年よりやや少ない発生であった。  
 ウ 茶業研究所( 御船町 ) の調査では、平年よりやや少ない発生であった。  
 エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。  
 オ 気象予報によると、7月の気温、降水量とも平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 産卵は新葉にのみ行われるので、三角葉巻前の萌芽～1葉期に防除する。  
 イ 摘採間近になって三角葉巻が見られた場合は、防除せず、摘採を早めて被害を軽減する。

#### 6) チャノキイロアザミウマ

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率は7.8% ( 平成10.4% ) と平年並の発生であった。  
 イ 生産環境研究所( 合志市 ) の粘着トラップでは、平年比少の発生であった。  
 ウ 茶業研究所( 御船町 ) の調査では、平年比少の発生であった。  
 エ 気象予報によると、7月の気温、降水量とも平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 三番茶を摘採する園では、萌芽期から1葉期に防除を行う。また、二・三番茶摘採後も摘採残葉や遅れ芽で増殖し、次茶期の発生源となるため、摘採後に防除を行う。

イ 中切り等の更新園、摘採中止園などでは、茶芽生育期間が長く、長期にわたり被害を受けやすいので、残効の長い薬剤(有機リン系、カーバメート系、合成ピレスロイド系)で防除する。

#### 7) チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率は1.8%(平成3.0%)と平成並の発生であった。

イ 茶業研究所(御船町)の調査では、平成比多の発生であった。

ウ 病害虫防除員の報告によると、6月の発生は平成比やや少～少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温、降水量とも平成並の予想である。

(3) 対策 ア 新芽を加害するので、萌芽～1葉期に防除を行う。

イ チャノホソガ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。

#### 8) カンザワハダニ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率5.1%(平成5.3%)と平成並の発生であった。

イ 茶業研究所(御船町)の調査では、平成比少の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成比やや多～並であった。

エ 気象予報によると、7月の気温、降水量とも平成並の予想である。

(3) 対策 ア 密度が高い場合、どの薬剤も効果が低下するため、発生初期の防除に心がける。

イ 摘採前に発生が多い場合は、摘採時期を早めて被害の軽減に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### カンキツ

#### 1) かいよう病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、新葉での発病は認められなかった。(平成の発病葉率2.7%)

イ 果樹研究所(宇城市)の調査(無防除甘夏)では、春葉での初発日は5月28日(平成の初発日5月22日)、果実では未発生(平成の初発日6月18日)であった。6月5半旬の発病葉率は0.0%(平成3.6%)で、発病果率は0.0%(4.2%)であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成並～やや少であった。

エ 気象予報によると、7月は気温、降水量とも平成並の予想である。

(3) 対策 ア 夏秋梢のミカンハモグリガの食害痕に、発生しやすい。ミカンハモグリガを防除するとともに、発病した葉・枝・果実を剪除する。

イ 果樹研究所(宇城市)における無防除甘夏の果実の発病最盛期は、平成で6月5半旬～7月4半旬である。

#### 2) 黒点病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、果実での発病を認めなかった(平成0.0%)。

イ 果樹研究所の調査(無防除興津早生)では、果実での初発日は5月27日(平成の初発日5月30日)で(平成比3日早い)、6月5半旬の発病果率は14.0%(平

年36.8%)で平年比低であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや少～少であった。

エ 気象予報によると、7月は気温、降水量とも平年並の予想である。

(3) 対策 ア 枯れ枝が伝染源である。剪定枝を園内に放置していると発病が多くなるので園外に持ち出し処分する。

イ 気温の高い夏場は、1～2日の潜伏期間の後発病するため、感染時期にあわせて防除を徹底する。果樹研究所(宇城市)での果実発病盛期は、7月2半旬～5半旬である。

ウ 前回散布からの降水量が200～250mmを超えた時期、または25～30日経過したら防除を行う。週間天気予報等を利用し、計画的に防除を行う。

### 3) ミカンハダニ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率は26.4%(平年25.5%)で平年並、10葉当たりの寄生頭数は19.2頭(平年8.7頭)でやや多い発生であったが、地域や園によって発生程度に差があった。

イ 果樹研究所の調査(無防除樹)では、6月5半旬の寄生葉率は3.0%(平年27.5%)であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月は平年比やや多の発生であった。

エ 気象予報によると、7月は気温、降水量とも平年並の予想である。

(3) 対策 ア ミカンハダニの要防除水準はメス成虫の寄生葉率30～40%、10葉当り5～10頭である。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

### 4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、平年比やや多～やや少の発生であった。

イ 気象予報によると、7月は気温、降水量とも平年並の予想である。

(3) 対策 ア 発生程度の調査は、展着剤または洗剤の5,000～10,000倍液をコップやビーカーに入れ、その液で果実100個を洗い、洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペや実態顕微鏡を用いて虫数を調査する。10頭以上を確認したら直ちに防除する。

## ナシ

### 1) 黒星病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉率1.3%(平年0.8%)と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや少～少であった。

ウ 気象予報によると、7月は気温、降水量とも平年並の予想である。

(3) 対策 ア 発病した葉や果実は園外に処分する。

イ 防除を徹底するとともに園の排水に努める。

## カキ

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少



- ( 2 ) 根拠 ア 6月の巡回調査では、果実の発病を認めなかった(平年0.0%)。
- イ 病虫害防除員からの報告では、6月は発生は平年比少であった。
- ウ 気象予報によると、7月は気温、降水量とも平年並の予想である。
- ( 3 ) 対策 ア 徒長枝の発病が多くなると果実の発病も多くなるので、発病した枝は園外に処分し、病原菌の密度を下げる。
- イ 発病後の薬剤防除では効果が低いので、薬剤の予防散布を徹底する。

## ブドウ

### 1) ベと病

- ( 1 ) 発生量：やや少
- ( 2 ) 根拠 ア 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや少であった。
- イ 気象予報によると、7月は気温、降水量とも平年並の予想である。
- ( 3 ) 対策 ア 発病後の薬剤防除では効果が低いので、薬剤の予防散布を徹底する。

## 果樹全般

### 1) カメムシ類

- ( 1 ) 発生量：並
- ( 2 ) 根拠 ア 生産環境研究所(合志市)及び天草農業研究所(天草市)の予察灯とフェロモントラップによる誘殺数調査では、チャバネアオカメムシは合志市で平年比やや多～並、天草市で平年並であった。ツヤアオカメムシは、合志市、天草市とも予察灯誘殺数は平年より多く、フェロモントラップ誘殺数は平年並となっている。
- 果樹研究所(宇城市)の予察灯とフェロモントラップでは、チャバネアオカメムシは平年並～やや少なく、ツヤアオカメムシは平年よりやや多い。
- イ ヒノキ球果の口針鞘数は、県内4地点(合志市、大津町、熊本市、宇城市)のうち6月下旬の値が最も高かったのは熊本市で0.2(前回6月上旬は宇城市で0.1)であった。離脱(樹園地への飛来)の指標とされる25に達するには、この先しばらく時間がかかる。
- ウ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年並～やや少であった。
- ( 3 ) 対策 ア 果樹園への飛来初期は局在し、発見が遅れやすいため、園をよく見回り、早期発見に努める。
- イ 最新の誘殺情報は、病虫害防除所のホームページを参照。

## 野菜病害

### 夏秋トマト(高冷地)

#### 1) 葉かび病

- ( 1 ) 発生量：少
- ( 2 ) 根拠 ア 夏秋トマト産地で導入されている品種は、ほとんどが葉かび抵抗性品種である。6月の巡回調査で葉かび病抵抗性品種を調査したところ、葉かび病の発生を認めなかった。
- イ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並の予想である。
- ( 3 ) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。
- イ 換気を良くし、過湿防止に努める。
- ウ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。

エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 2) すすかび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～やや少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

イ 換気を良くし、過湿防止に努める。

ウ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。

エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 3) 灰色かび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の発病株率0.1%)。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 換気を良くし、過湿防止に努める。

イ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 夏秋ナス(平坦地)

### 1) すすかび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病株率1.3%(平年3.4%)と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 換気を良くし、過湿防止に努める。

イ 伝染源となる発病葉は早めに取り除き、施設外へ持ち出し処分する。

ウ 多発後は防除が困難なので、初期防除を徹底する。本病は葉裏から発生するため、葉裏にも十分かかるように薬剤散布を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 夏秋キュウリ(高冷地)

### 1) べと病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉率2.7%(平年12.4%)と平年比少の発生であ

った。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。

イ ほ場の排水を良くし過湿防止に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## イチゴ（育苗床）

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の発病株率0.7%)。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 **ア 降雨による病原菌の飛散を防止するため、親株床、育苗床にはビニールで雨よけする。また、全面マルチや高設育苗を行い、泥水の跳ね返りを防止する。**

イ 頭上灌水は避け、株元に手灌水する。

ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。

エ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。特に、降雨後の摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので防除を行う。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### 2) うどんこ病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病株率3.3%(平年9.1%)と平年比やや少の発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比多～並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 **ア 盛夏期には潜在感染して菌そうが見えなくなるため、菌そうが見える7月のうちに防除を行い、菌密度を下げておく。**

イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

ウ 薬剤散布は葉裏に十分かかるようにする。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 夏秋キャベツ（高冷地）

### 1) 細菌性病害（黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病）

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の発病株率黒腐病2.3%、軟腐病0.0%、黒斑細菌病0.0%)。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月は発生を認めなかった。

- ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策
- ア ほ場の排水を良くする。
- イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。
- ウ 発病後の防除は困難なので、常発ほ場では予防防除を行う。

## 野菜虫害

### 夏秋果菜類

#### 1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率1.0% (平年9.8%) と平年比少、高冷地のキュウリでは寄生葉率8.0% (平年4.9%) と平年比やや多、高冷地のトマトでは寄生葉率が1.3% (平年4.9%) と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生はナス、キュウリ、トマトで平年並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並の予想である。

(3) 対策 ア これから気温が高くなると発生が多くなるので、黄色粘着トラップを設置し、早期発見に努め、初期防除を徹底する。

イ タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、ウリ類退緑黄化病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

エ 県内で発生しているタバココナジラミのほとんどは、バイオタイプQである。タバココナジラミバイオタイプQは、有効な薬剤が少ないので薬剤の選定に注意する。

オ 薬剤散布は、下位葉や葉裏など植物全体に十分かかるようにする。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

#### 2) アザミウマ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率19.3% (平年5.6%) と平年比多の発生であり、高冷地のキュウリでは寄生葉率2.0% (平年6.9%) と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並の予想である。

(3) 対策 ア メロン黄化えそウイルスに感染するキュウリ、メロン、スイカなどのウリ科作物は、育苗期からの防除を徹底する。

イ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

ウ ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色の粘着トラップ等を設置し、早期発見に努める。

エ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## イチゴ（育苗床）

### 1）ハダニ類

（１）発生量：やや多

（２）根拠 ア 6月の巡回調査（育苗床）では、寄生葉率32.0%（平成12.0%）で平成比多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平成並の予想である。

（３）対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に下位葉を重点に防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 夏秋キャベツ（高冷地）

### 1）コナガ

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生株率1.7%（平成17.3%）で平成比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成比やや多～少であった。

ウ フェロモントラップによる6月の誘殺数は、阿蘇市波野で平成比多、山都町鶴底で平成比やや多であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平成並の予想である。

（３）対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早期発見、早期防除に努める。また、幼虫は葉裏に寄生しているので、薬剤は葉裏まで十分かかるように丁寧に散布する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 野菜全般

### 1）ハスモンヨトウ

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった（平成の寄生株率イチゴ0.0%、トマト0.0%、ナス0.0%、キャベツ0.0%）。

イ フェロモントラップによる6月の誘殺数は、い業研究所（八代市鏡町）で平成よりやや多く、生産環境研究所（合志市）、高原農業研究所（阿蘇市一の宮町）、阿蘇市波野及び山都町鶴底で平成並であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成並～少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平成並の予想である。

（３）対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

オ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

## 2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナス、高冷地のトマトでは発生を認めなかった（平年の寄生株率ナス0.0%、トマト0.0%）。

イ フェロモントラップによる6月の誘殺数は、生産環境研究所（合志市）、高原農業研究所（阿蘇市一の宮町）で平年並、い業研究所（八代市鏡町）、山都町鶴底で平年比少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場をよく見回り、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

エ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

## 「トマト黄化葉巻病」育苗期の防除対策！！

現在、促成トマト、ミニトマトの栽培が終了し、今後は次作の育苗が始まります。トマト黄化葉巻病の今後の発生を抑制するためには、感染源の除去と保毒虫のハウス内侵入を防ぐことが重要です。当面の対策として、以下の防除対策を徹底しましょう。

### < 育苗期の防除対策 >

(1) 播種 10 日前にハウス内・周囲の雑草を防除する。

(2) 育苗施設の開口部（サイド、換気部など）には必ず防虫ネットを設置する。

なお、ネットの目合いは小さくするほど侵入を阻止する効果は高いが、高温対策に留意する。

(3) 近紫外線除去フィルムを天井に使用するか、ハウス周囲に光反射マルチを150cm幅で設置し、できるだけ侵入抑制を図る。

(4) ハウス内に黄色粘着トラップを設置し、侵入したコナジラミの密度を低下させる。

(5) ハウス内へのコナジラミの侵入状況を見ながら系統の異なる薬剤を散布し、育苗後期には登録のある粒剤をポット処理する。

(6) 発病苗は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに施設外に持ち出し処分する。

(7) 野良生えトマトは重要な伝染源となるので、徹底除去する。

## 農薬安全使用上の留意点

薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用し、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、薬剤の飛散により、ミツバチや魚介類など周辺動植物や環境へ影響がないよう、飛散防止対策を徹底するとともに、周辺住民や周辺の農業者・畜産業者・養蜂業者等へ事前に薬剤散布について連絡するなど、危害防止に努めましょう。

詳しい内容等については

生産環境研究所病害虫研究室（病害虫防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。